
眠り姫

新城高生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠り姫

【Nコード】

N98700

【作者名】

新城高生

【あらすじ】

これはとある純愛のお話…

(前書き)

A c i d B l a c k C h e r y の眠り姫をもとにしたお話です

眠り姫を聴きながらだと倍楽しめます (当社比)

絶望――

皆何気なく使う…俺も例外でない…だが…今日…初めてその意味が
わかった…

”望み”が”絶たれる”

それはこういうことだ…

ーオフィスー

その日は朝から落ち着かなかった

今思えばいわゆる虫の知らせだったのかもしれない

そしてそれは昼過ぎの出来事だった

いつも通り仕事をしていると、俺のデスクの電話が鳴った

受話器を取り相手の声を聞く

やがて俺は受話器を置いて、すぐに課長のもとへ駆け寄った

皆の注目が集まったのがわかったが、そんなことは気にならない

「課長！」

「どうした!?!」

「か、彼女の容態が…」

「そうか、わかった。すぐに病院に行ってあげなさい。」

「ありがとうございます!」

俺は深く頭を下げて会社を飛び出した

一病院一

会社の前でひろったタクシーで病院に駆け付けると、玄関の前で看護師が待っていた

今まで何度も容態が急変したことがあったが、迎えに来てくれたことは一度もない

看護師は足早に歩き出す

俺はその後に続いた

看護師は一般病室を通り過ぎ、ICUを通り抜け、一番奥の無菌室に俺を連れて行った

病室のガラスの向こうで彼女はたくさんの管に繋がれていた

心なしか管の数が増えたような気がする

中で慌ただしく動き回っていた医師が俺に気付き、中から出てきた

開口一番、医師は残念ですが…と言った

その後のことははっきりと覚えていない

ただ、もうあと今日、明日しか生きられない

しかも、意識が戻るかどうか別にして…

そんなような説明を受けた気がする

そして医師は最後に一般病室に移す、そう言って再び中に入ってしまった

中に入った医師は、容態の安定してきた彼女の口から管を抜いて、代わりに酸素マスクを着けた

— 一般病室 —

広い個室の真ん中で彼女は眠っている

「少し…窓開けるね」

俺はカーテンをひき、窓を開けた

夕日の暖かい光が病室に射し込む

俺はベッドの横の椅子に座り、彼女の手を握った

「病院の大銀杏…綺麗な黄色に色付いたよ…銀杏の葉っぱ、可愛く

て好きだって言ってたよな…」

俺は眠ったままの彼女の顔を見つめた

彼女の病気が見つかったのはちょうど一年前だった

―会社の定期検診後、彼女は病院に呼び出された

俺は幼い頃に亡くなった彼女の両親に代わり、”家族の方”として
ついていくことになった

そこで言い渡されたのは、聞いたこともない病名だった

それもそのはず、世界でその病気にかかったのは十数名、日本に至
っては初の発症者だった

そして、その致死率は

100%だった…

あまりのことに、思考も、感情も、何もかもが追いつかなかった

そんな俺らに追い討ちをかけるように医師は告げた

余命1年…

あまりにも短すぎた

それでも彼女は気丈に振る舞った

心配かけまいとするその姿が苦しくて仕方なかった

結局、彼女はあれから今の今まで、俺の前で一回も涙を流さなかった

親しい女友達の前でもだ

そんな彼女はある日テレビの取材を受けた

俺は気乗りしなかったが、良い意味で周りの目が変わった

上司も同僚も、できるだけ彼女の傍に居てやれと言ってくれた

俺は素直に言葉に甘え、彼女とあちこちに出掛けた

一個でも多く思い出を作りたいかった

けど、叶わなかった

余命宣告から半年後、彼女の体調は悪くなる一方で、ついに入院することになった

頭に浮かべたくもなかったが、気付かずにはいられなかった

死はそこまで来ている…

そしてついに今日

目の前に現れた…

―俺はふと泣いていることに気付いた

俺は彼女の手から片方の手を離し涙を拭い、それから彼女の髪をそつと撫でた

背中まで伸びた黒くしなやかな髪と長い睫毛…

笑うとできるえくぼと八重歯…

その全てがいとおしくてたまらない

愛してる…

俺はもう君が好きだった言葉も言えなくなっていた

止めどなく目から涙が溢れ出る

彼女のことを思い出せば思い出すほど、胸が苦しくなった

「…頼む…もう一度…最後に…一度だけでいいから笑ってくれ…頼む…」

俺は力強く彼女の手を握った

すると、微かだが確かに彼女の指が動いた

俺はハッとして彼女の顔を見た

彼女は

ゆっくり

その瞳を開けた

俺はあまりのことに言葉が出なかった

彼女は優しく微笑み、小さな声で言った

「…ありがとう…」

「そんな…俺の方が…」

俺が何一つ伝えたいことを伝えられないうちに、彼女はまた瞳を閉じた

そんな彼女の目尻を、一粒の涙が伝った…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9870o/>

眠り姫

2010年11月18日14時26分発行